

共生の森で「子ども自然塾」

大いに学び遊びました

親子79人が森を満喫



「ほくだって
工作できるのだ」



森の木に名札をつけてくれた「先生」からその木の特徴を教わる

日遊協主催「子ども自然塾」が10月27日、埼玉県嵐山町「共生の森」で開かれた。会員親子を中心に79人（うち子ども41人）が参加し、あいにくの曇り空だったが、にぎやかに森の自然を満喫した。

「共生の森」は、子供たちに自然の大切さを知ってもらおうことを願って、日遊協が主催、埼玉県、嵐山町、遊技業界13団体が後援し、嵐山町所有地を借りて10年計画で続けている里山造成事業。今年は5年目にあたる。今回のイベントは「共生の森」の趣旨に沿って、子どもたちに森や自然環境に興味や親しみを持ってもらうために企画され、嵐山町、公益財団法人埼玉県緑化推進機構、埼玉県森林サポーターズが運営協力した。

「たくさん歩いて」

参加者は午前9時ごろまでに同町、国立女性教育会館に集合した。子どもたち全員に「樹木ガイド」「みどりのおもしろ発見ノート」が配られ、バスで共生の森に移動。開会式

で知念安光日遊協理事が「樹木や池の生態を観察し、楽しく森



◀絵手紙にも挑戦



森の散歩の前に全員で記念撮影

の勉強をしてください。たくさん歩いておなかをすかせて、お昼ごはんをいっぱい食べてください」と挨拶した。続いて高橋兼次嵐山町副町長が「豊かな自然を後世に残すために、日遊協のこうした活動に感謝しています」と述べた。

植樹と生態観察

この後グループに分かれ、ヘルメットと軍手姿で、午前中は共生の森の中で植樹と自然探索を楽しんだ。植樹ではクリ、カキ、モモ、

スコップを持って自分で植樹▶



トチノキ、アケビ、イチジクなど実のなる木の苗30本が用意され、子どもたちは親と一緒に

緒に慣れない手つきでスコップを使い、苗を植えた。自然探索では池のほとりから丘の上までを散策した。埼玉県森林サポーターズのボランティアたちが、葉や枝の特徴などから樹木の見分け方を解説した。池の生態観察ではクチボソ、スジエビなどが捕れ、子どもたちが目を輝かせた。

全員「樹木博士」に

昼前に国立女性教育会館に戻り、子どもたちは「子ども樹木博士」の検定に臨んだ。枝や葉の標本を見たり触れたりしながら樹木名を当てるテストだが、子どもたちは森林サポーターの解説を思い出しながら、「えーと、えーと……」と苦戦していた。全員が樹木博士の「認定証」を手にしたが、成績に応じて初段から3段までランク付けがされていた。

栗ご飯に鶏モモ

昼食は国立女性教育会館の厨房を借りての炊き出し。親子たちは、

牛・豚・鶏・野菜をまとめて煮込んだ「共生の森鍋」、クリ炊き込みごはん、鶏モモやスペアリのオープン焼きなど、スペシャルメニューに舌鼓を打った。昼食後、森の工作教室では親子で竹トンボ

や鳥の巣づくりに挑戦した。じゃんけん大会や絵手紙教室も開かれた。午後3時過ぎ、参加家族はホウレンソウなど地元の産直野菜とお菓子をおみやげにもらって帰って行った。

東京都・関東支部ボランティア隊第7陣

「母子の写真」手作業でこそ観光の撮影に違和感

▽日時 10月17日～19日
▽場所 宮城県本吉郡南三陸町
▽隊員 隊長・森孝浩、副隊長・持丸裕高(株)千歳観光)、隊員・高橋宏充、永井華是美(株)千歳観光)、所久美子(株)プロテラス)、向後衛高岡俊彦(株)ヒノックス)
▽作業 民家跡の瓦礫、土砂撤去

今回、ボランティアセンターを通じて派遣されたのは、南三陸町五日町地区という所で、かつては町の中心部だったとのこと。港付近は、満潮時には海水が浮き出る状況でした。

作業は、津波で流された民家跡(基礎)での瓦礫の撤去でした。手作業で土砂を掘り起こすが、作業を始めて10分あまりで難しい作業であることが理解できました。剣



土砂撤去も力仕事だ

スコップが入らない。こぶし大の石がごろごろしており、瓦やガラスが混じり、石の運搬や分別に時間がかかる。重機を使うことで作業効率も上がるのではと考えましたが、写真や小銭等が出てくると手作業で進めなければならぬという事が理解でき、それが住んでいた方に返



森で勉強したあと「樹木博士」に挑戦



ると思うと気力が湧いてきました。特に写真は、お子さんとお母さんが、何かのイベントに参加されていたものと思われ、お二人の笑顔、見つめ合っている目が、過日の家族の強い絆を感じさせられました。

当時、最後まで避難放送を繰り返され被災された女性が勤務していた防災対策庁舎がすぐそばにあり、観光バスが頻繁にやってきました。観光事業自体は、復興に必要なことだと思えますが、津波に襲われた建物を背景に記念写真を撮る光景はものすごい違和感があり、もつと地域住民の気持ちを思いやる

ことが大切だと痛感しました。大震災後、一年半が経過する中、復興まではまだまだ時間がかかること、そして私たちが出来ることを支援する気持ち、行動に移す大切さを改めて感じた2日間でした。

(森 孝浩)